

紀伝道文人の家門意識と教育

— 愚息・鞭撻の両語をめぐる —

出口 誠

一、自謙の「愚」と「愚息」

「愚息」は、一部の漢和辞典でも指摘されるように和製漢語と考えられ、平安時代初期から用例が見える。ただし、とくに大江匡衡をはじめとする十世紀末以降の紀伝道文人が子息を「愚息」と称したことにより、広く定着したようである。また「鞭撻」も、日本での初例が匡衡に求められる。どちらにもここに常用される語であるが、これまでほとんど言及されてこなかった。そこで「愚息」・「鞭撻」の用例を分析し、日本において両語が用いられ始めた事情を考察することにより、紀伝道文人の家門意識と教育観とを明らかにしたい。

まず「愚息」は、漢語である「愚」と「息」とを組み合わせた語である。よって「愚息」という語の性格を知るためにも、はじめに「愚」と「息」との意味を確認しよう。「愚」は自謙の際に用いられる語で、次の例のように、自分が愚かであるとしてへりくだる際に用いられる。アウはみな皇帝に対してへりくだるもので、とくにイ・ウは一人称として「愚」、「愚臣」と述べている。一方でエは、賢者である四兄に対して杜甫自身が愚者であると位置付け、四兄への親しみの中に自謙ないし自

嘲するものである。またオ「愚策」のように、自らの所為が愚かであるとして謙遜する表現も見られる。

ア 臣愚以為陰陽者王事之本、群生之命。

臣愚以為らく陰陽は王事の本、群生の命なりと。

（『漢書』卷七十四、魏相丙吉伝）

イ 愚臣竊以古之五帝明之。

愚臣竊かに以るに古の五帝之を明らかにすと。

（『漢書』卷四十九、爰盎鼂錯伝）

ウ 愚以為宮中之事、事無大小、悉以咨之、然後施行、必

能裨補闕漏、有所益。

愚以為らく宮中の事は、事大小と無く、悉く以て之に咨り、然る後に施行せば、必ず能く闕漏を裨補し、広益する所有らんと。

（諸葛亮「出師表」『三国志』蜀書卷五、諸葛亮伝、

『文選』卷三十七）

エ 与^レ兄行年校^二一歳^一 賢者は兄愚者弟

兄と行年一歳を校^{くら}ぶるも 賢者は是れ兄愚者は弟

(杜甫「狂歌行贈^二四兄^一」)

オ 唯深達^二蕭王^一、願進^二愚策^一、以佐^二国安^一人。

唯だ深く蕭王に達して、願くは愚策を進め、以て国を佐^{たす}ける人を安んぜんと。

(『後漢書』卷十七、馮岑賈伉)

一方で、「息」は子息の意を指す。カの「賤息」は子息を卑下して謙遜する表現であるが、類例は極めて少ない。⁽³⁾ キのように、ただ子息の意として用いられることが普通である。

カ 老臣賤息舒祺、最少不肖、而臣衰、竊憐^二愛之^一。

老臣の賤息舒祺、最少不肖なれども、臣衰へ、竊かに之を憐愛す。

(『史記』卷四十三、趙世家)

キ 兄即清河崖公之第五息、嫂即太原公之第三女。

兄は即ち清河崖公の第五息、嫂は即ち太原公の第三女なり。

(張鷟『游仙窟』)

これを組み合わせると、「愚息」は子息が愚かであるとして謙遜する表現と言うことになろう。しかし唐代以前には、自らの所為を愚と称することはあつても、「愚息」や「愚父」など

のように、自らの係累を「愚」と卑下する表現は見られない。ただし、おそらくはこの境界に「愚子」の語がある。用例を挙げよう。

ク 若夫賢父之有^二愚子^一、此由^二天道自然^一。

若し夫れ賢父の愚子有るは、此れ天道自然に由る。

(『孔叢子』居衛)

ケ 圍棋堯舜以教^二愚子^一、博股紂所造。

圍棋は堯舜の以て愚子に教へ、博は股紂の造る所なり。

(『藝文類聚』卷七十四「圍碁」所引「晉中興書」)

コ 失^レ學從^二愚子^一 無^レ家住^二老身^一

學を失ひて愚子に従ひ 家無くして老身を住す

(杜甫「不^レ離^二西閣^一」二首(一)(二))

「愚子」は、ク・ケのように他者の子を指して、その子が愚かであるとする用法が主である。しかしコでは、「失^レ學從^二愚子^一」であるという。これは杜甫「屏跡三首(二)」に「失^レ學從^二兒懶^一」とあるのと同様で、「愚子」が學問をしないのに任せることを言う。つまりコは、學問をしないわが子を「愚子」と称して自嘲するものと考えられる。

次に日本の用例を確認しよう。サ^くセは九世紀から十世紀末までの「愚」の用例である。これらからわかるように、「愚」は中国と同様に、上位者に対する自謙として用いられていた。⁽⁴⁾

サ 右大臣從二位兼左近衛大将藤原朝臣内麻呂、縁病上_三表

辞_レ職曰、(中略)伏願辞_二罷官職_一、養疾私第_一、(中略)

然則陛下爵_レ不_レ失_レ実、愚臣免_レ不_レ避_レ賢。

右大臣從二位兼左近衛大将藤原朝臣内麻呂、病に縁りて職を辞せんと上表して曰はく、(中略)伏して願はくは官職を辞罷し、私第に養疾せんと、(中略)然らば則ち陛下実を失はざるを爵し、愚臣賢に避らざるを免る。

(『日本後紀』卷二十二、弘仁三(八一二)年九月二十一日)

シ 今所_レ請者、欲_レ令_三群臣重弁議以聞_二愚臣之鬱結_一也。

今請ふ所の者は、群臣をして重ねて弁議して以て愚臣の鬱結を聞かしめんと欲するなり。

(菅原道真「請_レ令_三議者反_二覆檢稅使可否_一状」)

『菅家文草』卷九「六〇二」

ス 斯乃尊閣所_レ照、愚儒何言。

斯れ乃ち尊閣の照らす所なれば、愚儒何をか言はん。

(三善清行「奉_レ菅右相府_一書」『本朝文粹』卷七「二八七」)

セ 聊述_二愚管_一、伏待_二天裁_一。

聊か愚管を述べて、伏して天裁を待たん。

(紀齊名「申_レ犯_二平頭_一」及第不及第并犯_二蜂腰_一落第例等_上状」

『本朝文粹』卷七「二七九」)

一方で、次に挙げるソ・タは、「愚息」の初例と第二例にあたる。いずれも天皇に対する上表であり、その中で「愚息」と述べて、わが子が愚かであるとへりくだるものである。ソ・タは前述したサ_一と同時期の用例であり、上位者に対して謙遜するために「愚」と卑下する点で、どちらも一連であると言いうる。

ソ 散位正五位下小倉王上表曰、(中略)但得_二愚息内舍人繁野、及小倉兄別王之孫内舍人山河等款_一俸。

散位正五位下小倉王上表して曰はく、(中略)但だ愚息内舍人繁野、及び小倉兄別王の孫内舍人山河等の款を得て俸す。

(『日本後紀』卷十二、延暦二十三(八〇四)年六月二十一日)

タ 二品中務卿兼大宰帥親王抗表曰、臣先請_二愚息改_レ姓爲_レ臣。

二品中務卿兼大宰帥親王抗表して曰はく、臣先づ愚息の姓を改めて臣と為さんことを請ふ。

(『日本三代実録』卷十七、貞觀十二年(八七〇)二月十四日)

このように、上位者に対して謙遜するために、「愚息」という表現が発生したものと考えられる。ただし、これ以降の「愚息」の用例は、一条朝期に活躍した紀伝道文人である大江匡衡を待つことになる。次は大江匡衡の漢詩文について検討したい。

二、大江匡衡における愚息

大江匡衡には複数の男子があり、挙周、能公と、養子の時棟とが知られている。結果的にこのうちの挙周が匡衡の後を継ぐこととなった。そして、じつは匡衡が「愚息」と言うときは、つねに挙周のことを指しているのである。古いものから順に、匡衡の「愚息」の用例を示そう。

チ 喜^三愚息^三挙周^三賜^三学問料^一聊写^レ所^レ懷寄^二呈廊下諸賢^一

愚息^三挙周^三の学問料^一を賜はることを喜び聊か懷ふ所を写して廊下諸賢に寄呈す

(同題『江吏部集』巻中)

ツ 方今情慵病侵、官冷齡仄。姓江翁、望^二江楼^一亦有^レ便、員外郎、遊^二外土^一亦無^レ妨。所^二賣持^一者祖父養生抄三卷、坐臥卷舒、所^二相従^一者愚息起居郎一人、晨昏左右。

方に今情慵くして病侵し、官冷じくして齡仄く。姓江の翁なれば、江楼を望むに亦た便有り、員外郎なれば、外土に遊ぶに亦た妨げ無し。賣持する所の者は祖父養生抄三卷、坐臥に卷舒し、相従ふ所の者は愚息起居郎一人、晨昏に左右す。

(八月十五夜野亭対^レ月言^レ志^一序

『江吏部集』巻上・『本朝文粹』巻八〔二一四〕

テ 今年兩度慰^二心緒^一 愚息遇^レ恩之至哉

今年兩度心緒を慰む 愚息恩に遇ふの至りかな

(寛弘三年三月四日、聖上於^二左相府東三条第^一被^レ行^二花宴^一。余為^二序者^一兼講^レ詩。講^レ詩之間、左丞相伝^二勅語^一曰、以^二式部丞^一挙周^三補^二藏人^一者。風月以來未^レ嘗聞^二此例^一、時人榮^レ之。不堪^二感躍^一、書^レ懷題^二于相府書閣壁上^一。)

『江吏部集』巻中)

ト 春花榮耀去年序【東三条花宴献^レ序、講席之間愚息^三挙周^二補^一侍中。父子^三拜舞^一】秋月清吟今夜詩

春花榮耀す去年の序【東三条花宴に序を献じ、講席の間愚息^三挙周^二侍中^一に補せらる。父子^三拜舞^一す】

秋月清吟す今夜の詩

秋月清吟す今夜の詩

(秋日東閣林亭即事^レ教)『江吏部集』巻上)

ナ 愚息前年為^二侍読^一 老儒今日祝^二長生^一

愚息前年侍読と為る 老儒今日長生を祝ふ

(昔祖父江中納言延喜聖代奉^レ付^二兩皇子之名^一【朱雀院天皇・天曆天皇】、天曆聖代奉^レ付^二兩皇子之名^一【冷泉院天皇・円融院天皇】。叔父左大丞奉^レ付^二當今之名^一。江家代々之功大也。匡衡承^二家風^一、寛弘五年十月奉^レ付^二若宮之名^一、寛弘六年十二月奉^レ付^二今君之名^一。聊著^二遺華^一、貽^二来葉^一。夫用^二其言^一、不^レ廢^二其人^一。聖主賢臣之本意也)

『江吏部集』巻中)

チはやや古く長保元年以前のもので、ツナは寛弘年間のものである。チナはいずれも上表ではなく、天皇に対してへりくだるソ・タとは異なっている。テ・トのように上位者に陪した際の詩もあるとおり、わが子を謙遜して「愚息」と呼ぶことに変わりはないが、詩題や自注において用いるなど、必ずしも謙遜しなくてよい場面でも用いるようになっていく。

なおツは寛弘二（一〇〇五）年八月に匡衡が近江に静養した際の詩序で、匡衡にただ一人付き従う挙周を「愚息」と称している。そのため上位者への敬意と言うよりは、匡衡の孤独や寂寞を引き立たせるための謙遜であると考えられる。一方で、ツ以外の四例は挙周の出世を喜ぶ際に用いられている。とくにテ・ト・ナはそれぞれ寛弘三、四、六年のもので、毎年のように出世する挙周に対する期待が読み取れる。

前に確認したコでも、杜甫が詩中で「愚子」と称していた。ただし「失」学」ともするように、わが子の愚かさを自嘲するものであった。しかし匡衡の場合、挙周が愚かであるとして貶すのではなく、むしろ挙周を言祝ぐものとなっている。あるいは、挙周が本当は愚かでないからこそ、「愚息」が謙遜になるということにもなる。

しかし匡衡の詩文にあっても、わが子の愚かな面を暴露する例がないわけではない。匡衡が長保四（一〇〇二）年五月に能公の学問料を申請した奏状では、「不_レ論_二才不才_一」と才学の有無にかかわらず能公に学問料を支給するように求めている。

二 右伏檢_二故実_一、菅原・大江兩氏、建_二立文章院_一、分_二別東西曹司_一。為_二其門徒_一、習_二儒学_一、著_二氏姓_一之者、濟濟于_レ今不_レ絶。因_レ斯此兩家之伝_二門業_一、不_レ論_二才不才_一、不_レ拘_二年齒_一。（中略）夫然則累代者見_レ重、起家者見_レ輕明矣。方今能公聚_レ窓之螢、漸照_二蠹簡_一、過_レ庭之鯉、志在_二竜門_一。若不_二吹嘘_一、何期_二成立_一。

右伏して故実を検するに、菅原・大江兩氏、文章院を建立し、東西曹司を分別す。其の門徒と為り、儒学を習ひ、氏姓を著す者、濟濟として今に絶えず。斯に因りて此兩家の門業を伝ふるや、才不才を論ぜず、年齒に拘らず。（中略）夫れ然らば則ち累代は重んぜられ、起家は軽んぜらるること明らかなり。方に今能公窓に聚むる螢、漸く蠹簡を照らし、庭に過ぐる鯉、志は竜門に在り。若し吹嘘せずんば、何ぞ成立を期せんや。

（『申_二男能公学問料_一状』『本朝文粹』卷六「一七四」）

「聚_レ窓之螢、漸照_二蠹簡_一、過_レ庭之鯉、志在_二竜門_一」は、捕まえた螢を光源として読書した車胤の故事と、『論語』季氏篇に見られる孔鯉の故事とを踏まえる。要するに、能公は読書に励みながら対策及策を目指していたということになる。しかし能公は、『権記』寛弘八年九月十五日条に民部丞として言及されることが知られるのみで、対策に及第したとは伝わらない。これを踏まえれば、「不_レ論_二才不才_一」は決して謙遜ではなかったのかもしれない。

一方で、これに先立つ長徳二（九九六）年ごろに、匡衡が右

中弁を兼任したいと願ひ出た奏状には、希望通りに兼官が叶えば、「老母」に孝養するほか、「痴児」が学問をしないのを鞭撻し、朝恩に喜んで大成を励ましたいとある。

又 安_三慰老母之欲_三傾殞_一、但競_三夕漏_一以捧_三微禄_一、鞭_三撻痴児之不_三学問_一、悦_三朝恩_一而励_三大成_一。

老母の傾殞せんと欲するを安慰し、但だ夕漏に競ひて以て微禄を捧げ、痴児の学問せざるを鞭撻し、朝恩に悦びて大成を励まさん。

(「申_三右中弁_一状」『朝野群載』巻九)

ヌでは「老母」と「痴児」とを対にして、いずれも匡衡の窮状を引き立たせつつ、兼官が叶った未来を展望している。一方で、ここでの「痴児」は、誰かひとりだけに限るわけではないものとも読める。「痴児」も愚かな子を指す語であるが、「愚息」のようにわが子の謙称として熟していたわけではない。中国には次のような用例がある。

ネ 楊素既知_三密之才幹_一、合_レ為_三王之爪牙_一、委_三之痴児_一、卒為_三謀主_一。

楊素既に密の才幹の、合_レに王の爪牙と為るべきことを知り、之に痴児を委ねるも、卒に謀主為り。

(『旧唐書』巻五十三、李密伝)

ノ 痴児不_レ知_三父子礼_一 叫怒索_レ飯啼_三門東_一

痴児は父子の礼を知らず 叫怒して飯を索して門の東に啼く

(杜甫「百憂集行」)

ネは楊素の子である玄感を「痴児」と言う。楊素は李密の才覚を見出し、玄感を任せしたが、玄感はいかに煬帝に叛逆してしまふ「痴児」であった。ノでは、父子の礼を弁えずに食事を求めて泣くわが子を「痴児」とする。匡衡はノのように、まだ幼さの残るわが子たちを「痴児」と称したものであろう。匡衡の男子のうち、挙周は大江家を継ぐべく順調に出世を重ね、養子の時棟も後に大学頭となったが、能公は目立った事績を残さず、おそらくは対策及第を果たせなかつた。しかし匡衡は、「痴児」を「大成」させ、わが子を大江家の後継者として育て上げようと「鞭撻」していたのである。

三、「鞭撻」の語をめぐって

いまいちど、ヌの「鞭_三撻痴児之不_三学問_一、悦_三朝恩_一而励_三大成_一」という一節について考えたい。というのも、確認する限りこれが日本における「鞭撻」の語の初例であり、特徴的な表現と言えるからである。漢語「鞭撻」は、もともとは鞭で打って使役したり懲らしめたりすることを指したが、転じて励ます意にも用いられた。次に挙げるのは、匡衡が目にしたであろう「鞭撻」の用例である。

ハ 蓋物無^レ定方^一、事無^レ常勢^一。是以呉侵^レ齊境^一、遂致^レ句踐之師^一、趙納^レ韓地^一、終有^レ上平之役^一。矧乃鞭^レ撻疲民^一、侵^レ軼徐部^一、築^レ皇擁川^一、捨^レ信邀^レ利。蓋し物に定方無く、事に常勢無し。是を以て呉は齊境を侵して、遂に句踐の師を致^レき、趙は韓地を納めて、終に上平の役有り。矧^⑤んや乃ち疲民を鞭撻し、徐部を侵軼して、擁川に築皇し、信を捨て利を邀^レむるをや。

(北魏・魏収「檄^レ梁文」『芸文類聚』卷五十八、檄)

ヒ 王安期作^レ東海郡^一。吏録^レ一犯^レ夜人^一来。王問、何処来。

云、從^レ師家^一受^レ書還、不^レ覺^レ日晚^一。王曰、鞭^レ撻甯越^一以立^レ威名^一、恐非^レ致^レ理之本^一。使^レ吏送^レ令^レ歸^レ家。

王安期東海郡と作る。吏一の夜を犯す人を録し来る。王問はく、何れの処より来ると。云はく、師の家より書を受けて還るに、日晚を覺えずと。王曰はく、甯越を鞭撻して以て威名を立つるは、恐らくは理を致す本に非ずと。吏をして送らしめて家に歸らしむ。

(『世説新語』政事)

フ 想得江南諸父老 因^レ君鞭^レ撻子孫^一多

想ひ得たり江南の諸父老 君に因りて子孫を鞭撻すること多きことを

(章孝標「送^レ張孝廉歸^レ呉」『千載佳句』及第、

『和漢朗詠集』慶賀「七六七」)

ハは、呉や趙の滅亡を例に他国に侵攻する愚を説くもので、民衆を強制的に使役するという意として「鞭撻」の語を用いている。ヒは、甯越は師の家から帰るのが遅くなり夜を犯してしまったが、王承は勉学に励む甯越を「鞭撻」するのは理に反すると考え、釈放して家に帰してやったという。つまりここでの「鞭撻」は懲罰を加えることを指す。

一方でフは、張孝廉が及第したことに触発されて、同郷の老人たちは子孫を「鞭撻」して勉強させるであろうと詠う。この詩句は、「千載佳句」や『和漢朗詠集』に採られているように、すでに人口に膾炙していた。ここでの「鞭撻」は、たとえば『和漢朗詠集』永濟注のように「ウチサイナミテ」などと解釈する余地もある。ただし、『千載佳句』・『和漢朗詠集』において及第や慶賀に分類されていることを考慮すれば、あくまでも及第への祝意を述べる詩句として受容されていたと想定されよう。その場合、「鞭撻」の暴力性は後景化し、むしろ「励ます」というくらいに解されていたのではないか。

そもそも、ヌも「励^レ大成^一」という文脈であった。匡衡はフを直接の典拠として、わが子が学問をしないのを、フで「江南諸父老」が「子孫」にそうしたように、対策及第を目指して勉強せよと励ますと述べているのである。この佳句を典拠として、「鞭撻」を「励ます」の意として用いていることは、当時の人々にとって一目瞭然であったに違いない。

しかし、典拠はそれだけであろうか。國立故宮博物院本ほかの『蒙求』古注本を見ると、「王承魚盜」句の注にヒとほぼ同文が引かれており、やはり「鞭撻」云々とある。当時は「蒙

求』を幼学書として用いることが一般的であったため、この故事も常識と言つてよいものであった。そして、王承は勉学に励む甯越を「鞭撻」しなかつたが、匡衡は学問をしない「痴児」を「鞭撻」するのであるという。王承の基準からすれば、匡衡の「痴児」は「鞭撻」されても仕方がない立場という事になる。

そのため、日本においてまだ熟していなかつた「鞭撻」の語感を想像するに、励ますという前提がありつつも、懲罰するという印象も与えたことであろう。匡衡があえて「鞭撻」の語を用いたのは、たとえ実際に「ウチサイナミ」はしないにせよ、いわば叱咤するという語感を意図してのことではなかつたか。

さきほど、本当は愚かでないからこそ「愚息」が謙遜になると述べた。それとは反対に、たとえばフの「子孫」を「鞭撻」するという表現よりも、匡衡のように「不_二学問_一」なる「痴児」を「鞭撻」すると表現した方が、より鮮烈な印象を与えることになる。これは、自身の窮状を訴えて任官を求める申官爵奏状の特性に適した表現であると同時に、匡衡の実際の悩みを吐露しているとも考えられる。

二にも表れている通り、匡衡は大江家の学問を伝えることに使命感を抱いていた。そして匡衡が「愚息」の語を多用したのは、上位者にへりくだることにより敬意を示すという以上に、わが子の賢愚に人一倍関心があつたからこそ、挙周が順調に出世することを喜び、謙遜してみせたのではないか。挙周だけを「愚息」と称したのは、とりもなおさず門業の後継者として期待をかけていたことの表れであろう。匡衡にとつての「愚息」は、紀伝道を支えるべき大江家の後継者を育てたいという、使

命感や親心が反映されていた。この点において匡衡はわが子を「鞭撻」したのである。

四、院政期以降の「愚息」

おそらくは匡衡が「愚息」の語を多用したことと関連して、一条朝以後には「愚息」の用例が増えてゆく。院政期ごろまでは正格漢文の中にか見られないが、その後は日記や和文脈の中にも見出されるようになる。まず、匡衡のように漢詩やその自注に用いる例を、院政期の漢詩を収める『本朝無題詩』からぬき出そう。

へ 題_レ詩還_レ彫_レ影_レ竜_レ跡 対_レ燭_レ易_レ驚_レ舐_レ懐_レ心【愚息頻漏_二灯燭料

之恩_一。故云】

詩を題して還つて恥づ彫竜の跡 燭に對ひて驚き易し舐懐の心【愚息頻りに灯燭料の恩に漏る。故に云ふ】

（藤原季綱「爐辺言_レ志」『本朝無題詩』巻五「三四八」）

ホ 竜駒七日成_二雲雨_一 鶴子千年刷_二羽毛_一【季部少卿相_二伴子

息_一加_二三座右_一、其中少子專受_二岐嶷之性_一、又期_二箕裘之業_一。予携_二愚息敦周_一、不堪_二慈愛_一、称_二其才能_一。憶_レ子之道、賢愚惟同。故云】

竜駒七日にして雲雨を成し 鶴子千年にして羽毛を刷く

【季部少卿子息を相伴して座右に加へ、其中の少子は専ら岐嶷の性を受け、又箕裘の業を期す。予愚息敦周を携へ

て、慈愛に堪へず、其の才能を称す。子を憶ふ道は、賢愚
惟れ同じ。故に云ふ】

〔藤原茂明「秋日山居即事」『本朝無題詩』巻七〔四四六〕〕

マ 風帆行路霽弥遠 水駅帰心秋早寒

愚息二人還咲^レ父 為^レ何遥赴^二海西瀾^一

風帆行路霽^レ弥よ遠く 水駅帰心秋早^一に寒し

愚息二人還た父を咲^わはん 何の為めにか遥に海西の瀾^{なみ}に赴
くと

〔蓮禪「遲^二留江泊^一戯賦^二舟中事^一」〕

『本朝無題詩』巻七〔五〇六〕

三例のうちへ・ホは紀伝道文人による詩で、それぞれ自注で
わが子を「愚息」と称している。へでは「愚息」が学問料に漏
れてしまったことへの親心を言い、ホでは「李部少卿」の男子
の優秀さを褒めつつも、「愚息敦周」を愛してやまない茂明の
親心が、子の賢愚にかかわらず「李部少卿」と同じであること
を述べる。またマは、蓮禪が船旅の最中に「帰心」を抱いた時
に、「愚息二人」は父の愚かさを笑うであろう自嘲するもので
ある。このように、『本朝無題詩』の三例における「愚息」
も、謙讓する意図がある場合にしても、上位者に対して絶対的
な敬意を示すものではなくなっている。そのうえで、ただの謙
称というだけでなく、「愚息」の「愚」に愚かという意味を持
たせる場合もある。

一方で詩以外に目を向けると、「愚息」の用例が一挙に増え

る。鎌倉時代までの三例を引こう。

ミ 同年九月廿六日、愚息左親衛相公溘然長逝、承保二年乙卯
三月十三日、又家督礼部納言尋而薨逝。

同年九月廿六日、愚息左親衛相公溘然として長逝し、承保

二年乙卯三月十三日、又家督礼部納言尋いで薨逝す。

〔大江佐国「宇治大納言遺^二唐石蔵閣梨許^一書」〕

『朝野群載』巻二十)

ム 来廿三日、愚息二人可^レ加^二元服^一。

来たる廿三日、愚息二人元服を加ふべし。

〔雲州往来』巻中末〕

メ 伊予の入道は、をさなくより絵をよく書き侍りけり。父う

けぬ事になん思へりけり。無下に幼少の時、父の家の中門
の廊の壁に、かはらけのわれにて不動の立ち給へるを書き
たりけるを、客人誰とかや慥かに聞きしを忘れにけり、こ
れを見て、「たが書きて候ふにか」と、おどろきたる気色
にて問ひければ、あるじうちわらひて、「これはまことし
きもののかきたるには候はず。愚息の小童が書きて候」と
いはれければ（後略）

〔古今著聞集』巻十一、画図第十六

「伊予入道幼少の時不動明王の像を画く事」

ミは『本朝無題詩』と並び早い例で、承保四（一〇七七）年三月に源隆国が成尋に送った書状である。ここでは「家督」の対として「愚息」の語を用いており、今は亡き次男である隆綱のことを謙称している。また『雲州往来』では、ムをはじめとする書状三通の中で「愚息」の語が用いられている。『雲州往来』は紀伝道文人である藤原明衡によるとされる書状の文例集で、紀伝道文人以外にも広く参照された。瀬野精一郎は金沢貞顕の書状中の「愚息」の用例を指摘するが、特に書状を起点として「愚息」の語が定着したようである。さらにはメのように、鎌倉時代になると和文脈の中にも取り入れられてゆく。ただし、わが子の賢愚に焦点を当てた上で、あえて「愚息」と称することは少なくなる。

誰にとつても、わが子の賢さや愚かさは重大な関心事となる。しかし、平安時代中期から院政期にかけての紀伝道文人は、後継者を育成して学問を継がせなければならぬため、子息の教育に人一倍熱心であった。就中大江匡衡は、大江家の学問の継承が国家的に重要であるとして主張する中で、わが子に期待や愛情をかけるからこそ「鞭撻」すると称し、またかえって「愚息」と謙遜するようになった。匡衡に続く紀伝道文人たちも、後継者となるべきわが子の才学に強く関心を持っていたからこそ、わが子のことを「愚息」という謙称するようになり、かつ単なる謙称以上の意味を響かせていたものと思われる。その一方で、第三者に対して自分の子息を謙遜する場面でも便利であったため、書状などによって「愚息」の語が広まり、今に至るまで定着したということになる。

（使用テキスト）

本稿で引用したテキストは、主に以下に拠った。引用に際し、私に字体・句読点・訓読を改めた。このほか、杜甫の漢詩は『杜甫全詩訳注』によった。

『孔叢子』 四部叢刊。『史記』・『漢書』・『後漢書』・『三国志』・『旧唐書』 点校本二十四史（中華書局）。『世説新語』 新釈漢文大系。『藝文類聚』 宋本（上海古籍出版社）。『文選』 全釈漢文大系。『游仙窟』 游仙窟校注（中華書局）。『日本後紀』・『日本三代実録』・『朝野群載』 新訂増補国史大系。『菅家文草』 日本古典文学大系。『千載佳句』 歷博本（国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書）。『和漢朗詠集』 和歌文学大系。『江吏部集』 板本群書類従。『本朝文粹』 新日本古典文学大系。『雲州往来』 雲州往来享祿本研究と総索引。古今著聞集』 新潮日本古典文学集成。『和漢朗詠集』 永濟注 和漢朗詠集古注釈集成。

注

- (1) 『新選漢和辞典』第八版（小学館、二〇一〇）。
- (2) 中世文書における「愚息」の用例について、瀬野精一郎「愚身・愚妻・愚息」（『日本歴史』五百八十四、一九九七）に言及がある。
- (3) たとえばこの他に「豚犬」の語がある。もとは『三国志』卷四十七、呉書・呉主伝の裴注所引「呉歴」に「生子当如孫仲謀」、劉景升兒子若「豚犬耳」とあるように、他人の子を貶す語であった。自分の子息を「豚犬」と称する例として、『旧五代史』卷二十七、唐書・莊宗紀（一）に、「梁祖聞其敗也、既懼而歎曰、生子当如是、李氏不亡矣。吾家諸子乃豚犬爾」と見えるが、おそらくは前掲「呉歴」を踏まえてわが子を卑下するものであるため、例外的である。

- (4) このほか、「而老父齡傾、青衫不_レ改_三於柴靡之裏_一、愚子年少、朱衣漫曳_三於周行之間_一」(大江朝綱「為_二賀茂保憲_一請_下以_レ所_二帶爵_一讓_中親父忠行_上状」)『本朝文粹』卷六〔二七〇〕や「其才劣焉、雖_レ似_三至愚之老父_一、其祖頭矣、誠是前賢之末孫」(菅原文時「申_二男惟熙_一学問料_一状」)『本朝文粹』卷六〔一七二〕のような用例があるが、いずれも提出者の父や子のための奏状であり、その中で提出者自身を「愚子」や「至愚之老父」と謙称するものである。
- (5) 趙が秦に敗れ、滅亡の原因となったとされる戦争は、ふつう「長平の役」という。誤字か。
- (6) 瀬野、前掲(2)。

(でぐち まこと 金沢学院大学)